OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本語の否定対極表現とアクセント（Ⅰ）：「不定語」に助詞“も”が後接する場合
Author(s)	三宅, 知宏
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 2022, 56, p. 1-18
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/94873
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

日本語の否定対極表現とアクセント（Ⅰ）

──「不定語」に助詞“も”が後接する場合──

三 宅　知 宏

キーワード：否定対極表現／アクセント／助詞“も”／否定／不定語

1. はじめに

本稿は、助詞“も”の後接により生産的に形成された形式が、「否定対極表現」としての性質を持つ場合における、文法とアクセントとの関係について考察することを目的とする研究の一端をなすものである。

次例を見られたい。なお、以下、本稿におけるアクセントの表示は、当該の語をひらがな表記した上で［ ］でくくり、アクセント核を「＼」の符号で示す。いわゆる「平板型」は語末に「¯」の符号をつけることで示す。[1)]

（1）そこにあるものは なにも 食べなかった / *食べた

（2）“なにも”［なにも¯］［*な＼にも］（“なに”［な＼に］）

上の（1）のように不定語“なに”に“も”が後接した“なにも”という形式は、（1）のような文においては、必ず否定述語を伴わなければならず、いわゆる否定対極表現としての性質を持っていると言える。[2)] その際、興味深いのは、（2）で示したように、“なにも”における“なに”が本来持つアクセント型とは異なり、平板型で発音されるということである。

このような現象は、次例のように、不定語の場合だけでなく、「最小」を表わす数詞“1”を含む名詞に“も”が後接した場合にも観察できる。

（3）その店に客は 一人も 来なかった / *来た

（4）その店に客は 二人も（三人も / 10人も / …）来なかった / [OK]来た

(5) “一人も”［ひとりも￣］［*ひと＼りも］（“一人”［ひと＼り］）

(6) “二人も”［*ふたりも￣］［ふた＼りも］（“二人”［ふた＼り］）

上の（3）のように、“一人も”は、否定対極表現としての性質を持つと同時に、本来のアクセント型ではなく、平板型になっている（(5) を参照)。しかし（4）のように、“1”以外の数詞の場合はこのような現象は見られない（(6) を参照)。

本稿は、このような現象について考察し、実証可能で、有意義な一般化を導くことを試みるものであるが、便宜的に、本稿は「不定語」の場合に限定した考察を行い、「「最小」を表わす数詞“1”を含む名詞」の場合は、次稿（三宅（準備中））において行うこととする。

さらに副次的にではあるが、本稿は、日本語の「不定語」に関して、新たな分類の提案を行う。

結果として、本稿は、次稿とともに、「文法（形態論、統語論)」と「音韻論」のそれぞれの研究成果を融合させることの有効性を示すことになる。

本稿は以下の構成をとる。2 において、先行研究と問題の所在を明らかにした上で、3 において、「不定語」の場合について、仮説を立て、それを検証するという方法で一般化を導く。4 において、まとめを行う。

2. 先行研究と問題の所在

2.1. 「アクセント」に関する研究

アクセントに関する辞書類では、限られた個別の用例に記述が与えられているだけで、「規則」の形での記述はない。秋永（編）(2001)、NHK 放送文化研究所（編）(1998) のどちらにも、巻末に「アクセント規則」の一覧があるが、この現象に関する記述はない。

辞書の項目としては、秋永（編）(2001)、NHK 放送文化研究所（編）(1998) の両者において“一人”“誰”が、秋永（編）(2001) のみに“なに”が、

NHK 放送文化研究所（編）（1998）のみに“一つ”が、あげられているだけである。そこでは、単独では“[ひと＼り]”“[だ＼れ]”のように核を持つが、“も”を伴った場合は“[ひとりも￣]”“ [だれも￣]”のように平板になることが記述されている。

代表例を個別に記述するだけで、体系的な規則化がなぜ放棄されているのかということについては、次に引用する、前田（2008）が示唆的である。

(7) なお、アクセント辞典類でこのように、不定語や最小数量詞（小量詞）と「モ」との組み合わせごとに個別の立項が必要なのは裏返していうと、

ⅰ）「いつも」は否定対極性を欠いていて肯定文で一般にもちいられ、また否定文でも平板型アクセントにならない、

ⅱ）「すこしも～ない」とはいっても「*わずかも～ない」「*少々も～ない」とはいわない、

ⅲ）「すこしも（～ない）」は平板型アクセントでも「ちっとも（～ない）」は平板型アクセントではない、

等々、組み合わせごとに語彙的指定の必要な部分が大きいからと思われる。 （前田（2008：540）巻末注の4）

実際に、前田（2008）も規則化を目指してはいない。しかしながら、規則の対象となる形式を適切に限定すれば、この現象に関する規則化は十分に可能であると思われる。

本稿は、「不定語」に限定することで、さらに「不定語」も適切に下位分類することにより、規則化を図るものである。

また次稿（三宅（準備中））も含む、本稿からの一連の研究において、「「最小」を表わす数詞“1”を含む名詞」の場合も「不定語」の場合と同様の一般化が可能であることが示される。

2.2. 「不定語」に関する研究

ここからは、いわゆる文法に関する研究において、当該の現象がどのよう

に記述されているかを見ておく。まずは「不定語」に関する研究である。

尾上（1983）では、「不定語」の性質を次の（8）のように仮定した上で、不定語の様々な用法が、全てそこから導かれることを論じている。

（8）「内容が不明、不定」、「その指示する人や物や時や所や数や様態の内容が明らかではない、定まらない」[3)]

網羅的にあげられている不定語の用法のうち、本稿が考察の対象としているものは、「特定・明確化不志向系用法」の中の「汎称用法」、さらにその中の＜汎称否定タイプ＞と＜一般性状況語タイプ＞が相当する。

（9）＜汎称否定タイプ＞　（尾上（1983：417））

現代語文型〔x モ―否定語〕○誰も知らない。○なにも知るまい。

（10）＜一般性状況語タイプ＞　（同：420）

現代語文型〔x モ―〕○いつも陽気に暮しましょう。

上の＜汎称否定タイプ＞は否定対極表現にあたるが、＜一般性状況語タイプ＞はそうではない。同じ「不定語＋も」でも、否定対極表現とそうではない用法があること、また、否定対極表現の場合も、単に「否定と呼応する」というような記述にとどめず、「汎称否定」としていることなど、重要な指摘がなされているが、アクセントに関する記述はない。

また、形式の網羅的な列挙もなされてはいない。例えば、“どこも”は両方の用法を持ち、その際、アクセントに異なりが見られるが（詳細は後述）、そのような情報は記述されてはいない。

益岡・田窪（1992）では、“だれ”、“なに”、“どこ”等を「疑問語」と呼び、“だれか”、“だれも”、“だれでも”等のように、疑問語に“か”、“も”、“でも”が付いて不定の対象を指し示す語を「不定語」と呼んだ上で、（11）のような例文を挙げ、（12）のような記述をしている。

（11）この問題を解いた人は誰もいない。　（益岡・田窪（1992：40））

（12）「～も」は、否定の表現を伴って対象の不存在を表し～　（同：39）

益岡・田窪（1992）においても、やはりアクセントに関する情報、形式の網羅的な列挙はない。したがって“どこも”の扱いは不明である。

また、“いつも”については、次の（13）のように述べられているが、これでは、“いつも”が否定表現で使われた場合は、“だれも”、“なにも”と同じかどうかが不明である。

（13）＜注 2 ＞「いつも」は、「彼はいつも遅れる」のように、肯定表現でも使われる。また、「だれも」は、ガ格の形式で用いられるときは、「誰もが知っている」のように肯定表現となる。（益岡・田窪（1992：40））

詳細は後述するが、“いつも”は否定対極表現ではなく、アクセントの特殊性（平板化）もないので、“だれも”、“なにも”とは異なった扱いが必要である。

2.3.　助詞“も”に関する研究

次に、助詞“も”に関する研究における当該の研究の記述に関してである。

まず、寺村（1991）では、（14）（（15）はその例文）、（16）（（17）はその例文）のような指摘がなされている。「P」は「述語」の意味である。

（14）X〔少ない数量（分割不可能な 1）〕モ＋P〔否定〕

「1」（ただし分割不可能な 1）を代表とする、少量を表す名詞にモが付いて、それが否定の述語と結びつくと、一般に、＜少なさ＞の強調、いわゆる全部否定になる。このような「X モ」を、肯定の述語で結ぶことはできない。（寺村（1991：83））

（15）a. 賛成する者は一人もいない。　b. *賛成する者は一人もいる。

（16）X〔疑問語句〕モ＋P〔否定〕

ドコ、ダレ、ナニなどの疑問名詞（＋格助詞）にモが付いて、それが否定の述語で結ばれると、（中略）全部否定になる。（同：83）

（17）わたしはなにも知りませんよ。（同：84）

また、「疑問語句＋モ」が肯定の述語をとる場合に関しては次のように指摘している。

（18）X〔疑問語句〕モ＋P〔肯定〕

「疑問語句＋モ」は、全体的に見て、述語の否定的な形とはなじむが、肯定的な形とはなじみにくい。その程度は疑問語によって違いがある。ダレモ、ナニモ、（中略）などは、肯定的述語とは結びつかない。

（同：84）

ドコモは、結びつく場合と、結びつかない場合とがある。　（同：85）

イツモ、ドチラモは、肯定・否定の別なく、どちらとも結びつき、肯定なら全部肯定、否定ならふつう全部否定になると一応いえるが、どちらかといえば肯定との結びつきのほうがふつうのようである。

（同：85）

このように、寺村（1991）では、「分割不可能な 1」と「疑問語句」を同じ位置づけで扱っている点が重要であるが、アクセントに関する情報はない。また、「疑問語句」の場合、否定形 / 肯定形との「なじみやすさ」という「程度」の問題にしてしまっている点に不十分さがみられる。それは“どこも”の扱いにおいて顕著になる。さらに言えば、“いつも”が否定と結びついた場合は「全部否定」と言うべきではないし、本稿で後述する「特殊な構文」に関する言及がない点にも不足がある。

助詞“も”に関する研究として重要な沼田（1986）では、本稿で問題とする現象に関しては、（19）（（20）はその例文）のような簡単な記述しかなされておらず、アクセントに関する情報、「不定語」の場合に関する記述はない。

（19）数量が最小量としての「1」の場合は、肯定述語とは共起できない。必ず否定述語と共起して全面否定を表す。　（沼田（1986：169））

（20）今日は、学生が一人も来ない（cf 学生が 1 人も来た。）　（同）

2.4. 「否定」に関する研究

吉村（1999）は、本稿の「否定対極表現」（“Negative Polarity Items” 以下、“NPI”と略す）のことを「否定極性項目」と呼んでいるが、意味するところ

は同じであり、次のように定義されるものである。本稿もこの定義を踏襲する。

（21）否定極性項目（NPI）は、否定文脈にのみ適切に現れることができる表現である。（吉村（1999：4））

吉村（1999）において、NPI の日本語の例として挙げられているものの中に、“誰も”“一言も”があるが、アクセントや助詞“も”に関する分析はない。

また、日本語の「否定」に関する包括的な研究である、工藤（2000）においては、「否定と呼応する形式」として次のようなものが挙げられている。

（22）一つも、一人も、誰も、なにも、…（工藤（2000：105））

その上で、“一人”“一つ”“一言”のようなタイプの数量にかかわる形式については、「助詞「モ」がついて、完全否定」（同：119）という記述がなされているが、やはりアクセントに関する記述はない。

一方、郡司（2006）、中西（2010）では、アクセントに関する指摘はあるが、「不定語」及び最小を表わす数詞“1”に助詞“も”が後接した形式に関する詳細な記述は見られない。

2.5. この章のまとめ

以上のように、先行研究では、「不定語」及び最小を表わす数詞“1”に助詞“も”が後接し、否定対極表現としての性質を持つ場合における、文法とアクセントとの関係についての総合的、かつ詳細な記述はなされていないと言える。

このような先行研究において十分ではないと思われる記述を、新たに試みようとするところに本研究の独自性がある。

本稿では、このうち特に「不定語」の場合について考察するものである。

なお、先行研究をふまえて、「否定対極表現（NPI）」については前述の（21）を、「不定語」については前述の（7）を、以下の考察の前提とする。

3. 仮説とその検証　―「不定語」の場合―

3.1. 仮説

この章では、「不定語」に助詞“も”が後接する場合について考察するが、次のような仮説を立てて、それを検証するという方策をとる。次の（23）を見られたい。

（23）仮説①：

「不定語」に助詞“も”が後接することにより、生産的に形成された形式は、「否定対極表現（NPI）」としての性質を持つとき、そしてそのときに限り、平板型アクセントになる。

この仮説が規則として成立するかどうかについて、以下で検証する。まずは不定語のうち、“だれ”と“なに”の場合を観察しよう。

（24）a.［だれも￣］いなかった / *いた

b.［*だ＼れも］いなかった / いた

（25）a.［なにも￣］なかった / *あった

b.［*な＼にも］なかった / あった

上の（22）（23）の対比を見れば分かるとおり、これらは“も”が後接した場合、「否定対極表現」（以下「NPI」とする）としての機能を持つと同時に、アクセントが平板に必ずなる。次例は、両者が並列されているが、同様である。

（26）その場では、だれもなにも言わなかった。（［だれも￣］［なにも￣］）

“だれ”及び“なに”の場合は、まさに（21）の仮説通りと言える。

次は、“いつ”についてである。

（27）a.［*いつも￣］いなかった / いた

b.［い＼つも］いなかった / いた

“いつ”は、“だれ”及び“なに”とは異なり、そもそも平板型のアクセントをとらない。そしてNPIとしての性質も持っていない。それではどのような意

味を表しているかと言うと、全ての場合に、述語によって表される事態が成立するという、いわゆる「全称量化」である。

前述の（23）の仮説は、NPIの場合にのみ平板型になる旨を述べているのであり、NPIではなく、そして平板型にならない、“いつ”の場合は、（23）の仮説に違反しないと言える。

次に、“どこ”についてである。

（28）a.［どこも￣］行かなかった / *行った

b.［どこも￣］悪くない / *悪い

上例のような平板型アクセントの“どこも￣”は、述語に否定を要求することから、NPIとしての性質を持っている。これだけなら（23）の仮説通りなのだが、しかし“どこ”は、“も”を後接しても平板型にならず、通常のアクセントのままという例が存在する。平板型のアクセントをとる場合ととらない場合の両者を持つという点で、他の不定語と異なるのである。通常のアクセントのままという例とは次のようなものである。

（29）連休中のホテルは［*どこも￣］/［ど＼こも］満室だ

（30）クリスマスの洋菓子店は［*どこも￣］/［ど＼こも］大賑わいだ

（31）駅のホームは［*どこも￣］/［ど＼こも］禁煙になっている

注意すべきは、これらの平板型をとらない“どこも”は、NPIとしての性質を持っていないということである。一見、（23）の仮説と相容れないようで実は、NPIの場合は必ず平板型アクセント、そうでない場合は必ず通常のアクセント、というように規則的であり、（23）の仮説通りなのである。

以上、（23）の仮説を立てたが、この仮説の前提として、助詞“も”を後接した場合の「不定語」の分類が必要であった。まとめると以下の通りである。

（32）助詞“も”を後接した場合の「不定語」の分類

A類：“だれ”“なに”：常にNPIになる（ただし特定の構文を除く）

B類：“どこ”“どれ”：NPIになる場合とならない場合がある

C類：“いつ”　　：常にNPIにはならない

このような分類は、従来の研究で指摘されてはいないが、本稿における考察に基づけば、「不定語」の研究にも示唆が与えられると思われる。

なお、上のA類で例外となる「特殊な構文」については後述する。

3.2. 検証1（だれもが）

この節からは、4点にわたって、具体的に、事例に基づいて、前述の（23）の仮説を検証する。

第1に、“だれも”に主格を表わす格助詞“が”が後接して、“だれもが”という形式になった場合である。

通常、“も”は主格の格助詞を後接させることはないが、“だれもが”は例外的に可能である。[4)]

（33）a. だれもが来なかった　　b. だれもが来た

（34）a. [だ＼れもが] / [*だれもが‾] 来なかった

　　b. [だ＼れもが] / [*だれもが‾] 来た

ただし、この“も”に主格の格助詞の後接が可能になる現象は、不定語一般ではなく、“だれ”の場合に限られる。[5)]

さらに、（33b）に見られるように、肯定述語とも共起できることから、“が”の後接により、“だれもが”は、“だれも”が有していたNPIとしての性質が失われている。意味としては、“みんな”、“全員”のような「全称量化」が表されるが、少なくとも単純には“だれ”、“も”、“が”それぞれの意味の合成からは得られないものである。

この“だれもが”という形式については、興味深い点が多くあるが、本稿の関心の外にあるため、これ以上は、ここでは議論しない。

本稿の論点に戻って、この現象を観察した場合、（34）に見られるように、“だれもが”は通常のアクセントであり、平板型ではないことが分かる。

即ち、“だれも”に“が”が後接した場合、NPIではなくなると同時に、平板

型アクセントでもなくなるのである。これは、（23）の仮説と矛盾しない。

3.3. 検証2（だれもかれも / なにもかも / どこもかしこも）

第 2 に、“だれも”、“なにも”、“どこも”にそれぞれ“かれも”、“かも”、“かしこも”が後接した場合である。

これらは、“だれもかれも”、“なにもかも”、“どこもかしこも”全体でひとまとまりの形式（要素の合成からは得られない意味を表わす形式）と見なされるものである。

（35）a. だれもかれもそれを欲しがった。
　　b.［だ＼れも］かれもそれを欲しがった。
（36）a. 災害でなにもかも失った
　　b. 災害で［な＼にも］かも失った。
（37）a. どこもかしこも人でいっぱいだ。
　　b.［ど＼こも］かしこも人でいっぱいだ。

上例からも分かるように、これらの形式はNPIとしての性質は有していない。そして同時に、平板型アクセントでもなくなっているという点が重要である。これは（23）の仮説と矛盾しない。

3.4. 検証3（“なにも”の特殊な構文）

第 3 に、“なにも”による特殊な構文の場合である。次のような例を見られたい。

（38）a. なにも、そんなに厳しく言うことないでしょ。
　　b. なにも、そんなに一所懸命やらなくてもいいよ。
（39）a. なにも、私は君が憎いから言っているわけではない。
　　b. なにも、私は君を脅したいわけではない。

このような“なにも”は、通常とは異なり、過度な行為や思い込みを是正す

るような文脈で用いられる修飾句としての性質を有していると言える。少なくとも、述語が要求する「項」（述語と格関係を持つ要素）ではない。

このタイプの“なにも”が生起する文は、二人称の行為の場合は文末が“～ことはない”、“～なくてもいい”、一人称の行為の場合は文末が“～わけではない”になることが多いことからも、“なにも”の用法というより、“なにも”が生起した文全体を型とする一種の構文とみなした方がよい可能性があるが、詳細な分析は、本稿の論点から外れるので、控えたい。ここでは「“なにも”の特殊な構文」と称しておく。

本稿の論点に照らして重要なのは、この場合の“なにも”のアクセントは［な＼にも］であり、平板型ではないことである。

（40）a.［な＼にも］、そんなに厳しく言うことないでしょ。

b.［な＼にも］、私は君を脅したいわけではない。

前述の（23）の仮説に従えば、この場合、NPI ではなくなることを予測するが、しかし、この構文における“なにも”は、次例に示されるように、やはり NPI である。

（41）a. *なにも、それくらい厳しく言ってもいいよ。

b. *なにも、私は君を脅したいわけだ。

これは、一見、明らかに（23）の仮説の反例になるように思われるが、しかし、この構文の場合、NPI であっても、呼応する否定は、いわゆる「部分否定」であると言える。それに対し、平板型アクセントをとる NPI の“なにも”は、いわゆる「全部否定」である。[6)]

ここでは、（23）の仮説を以下のように修正することで、対応することとしたい。単なる「否定」ではなく「全部否定」に限定するということである。

（42）仮説②：

「不定語」に助詞“も”が後接することにより、生産的に形成された形式は、「全部否定」の意味を表す「否定対極表現（NPI）」としての性質を持つとき、そしてそのときに限り、平板型アクセントになる。

この修正によれば、この構文の“なにも”も仮説の例外ではなく、むしろ仮説を補強する事例となり得る。

3.5. 検証4（“～もなにも”の特殊構文）

第4に、“なにも”が“～も”に後接し、“～もなにも”という形式になった場合である。

（43）生徒たちはなにも言わなかったし、先生もなにも言わなかった。

上例のような“～もなにも”は、前文脈に別の“なにも”が既出であることからも分かるように、たまたまそのような語順になっただけであり、“～も”と“なにも”が何らかの「まとまり」をなすものではない。実際に“～も”と“なにも”の間にポーズを置くこともできる。そして、“なにも”におけるNPIとしての性質と平板型アクセントという点でも、通常の場合と全く違いはない。特別扱いする必要はないものということである。

この節で取り上げたいのは、上例のようなものとは異なり、“～もなにも”が一種のひとまとまりの形式であるかのようなふるまいを見せるものについてである。次例を見られたい。

（44）パンにはバターもなにもつけなかった。

（45）砂糖もなにも入れない紅茶を飲んだ。

（46）それは証拠もなにもないただの噂だ。

（47）それについては納得できる説明もなにもない。

（48）マスクもなにもつけずに、そこに入った。

（49）この作品には面白みもなにもない。

これらの“なにも”は、前接する“～も”を伴った名詞句とまとまりを持つ句を形成していると考えられる。ただし、このような“～もなにも”がどのような意味を表わしているかについての詳細は、ここでは控える。

本稿の論点に従って観察すると、このような場合でも、“なにも”は、「全部否定の意味を表すNPI」としての性質を持ち、かつ平板型のアクセントを

とっているということが分かる。（42）の仮説通りであり、仮説を補強するものである。

問題になるのは次のような場合である。

（50）自分のプライドもなにもかなぐり捨てた。

（51）ここでは遠慮もなにも忘れてください。

（52）この失敗のために、上司としての権威もなにも消し飛んでしまった。

これらの“～もなにも”は、肯定の述語と共起していることからも分かるように、“全部”“すべて”のようないわゆる「全称量化」としての意味を表すものであり、NPIとは言えない。

このような場合の“～もなにも”については、管見の限り、先行研究もなく、詳細な分析、記述を行いたいところだが、本稿の範囲を超えるので、ここではこれ以上の詳細を述べることは控える。

本稿の論点にとって重要なのは、この場合の“なにも”は、NPIとしての性質を持たないのと同時に、アクセントも［な＼にも］であり、平板型ではないということである。（42）の仮説に矛盾しないと言えるのである。

“～もなにも”という形式については、次のような表現も観察することができる。

（53）「この企画案、知ってる？」「知ってるもなにも、ぼくが立てた案だよ。」

（54）「佐藤さんをご存知なのですか」「ご存知もなにも、大学の同期ですよ。」

（55）「正直に答えたのか」「正直もなにも、本当にありのままを話しました。」

このような“～もなにも”は、話し言葉的であり、程度が過度であるというような意味を表していると言える。

この場合に限って、動詞句や形容詞句にも後接できるようである。[7)] 動詞句に後接する例が次の（56）、形容詞句に後接する例が（57）である。

（56）笑ったもなにも、あごがはずれそうになるくらいでした。

（57）おいしいもなにも、初めて体験する味でした。

これらの“～もなにも”についての詳細も、ここでは控えるが、本稿の論点において重要なのは、これらはNPIではなく、そして同時に、平板型アクセ

ントでもないということである。（42）の仮説には矛盾しないのである。

なお、この節でとりあげた“～もなにも”がある程度、ひとまとまりの形式となっている場合の諸相について、これを一種の構文と考えるかどうか、また構文と仮定した場合、それがどのような意味、用法を表わしているかについては、興味深い点が多くあるので、別稿で、改めて論じることとしたい。

3.5. この章のまとめ

この章では、仮説を立て、それを具体的な事例に基づいて、検証した。

（23）で立てた仮説を、（42）のように修正したが、修正後の仮説に関して、取り上げた事例は、ことごとく従うものであった。

この章で立てた仮説は、実証可能なレベルに一般化できたものと考える。

4. おわりに

4.1. 本稿の結論

本稿では、「不定語」に助詞“も”が後接することにより、生産的に形成された形式が、「否定対極表現」としての性質を持つ場合における、文法とアクセントとの関係について考察を行い、以下のような一般化が成り立つことを示した。

（58）「不定語」に助詞“も”が後接することにより、生産的に形成された形式は、「全部否定」の意味を表す「否定対極表現（NPI）」としての性質を持つとき、そしてそのときに限り、平板型アクセントになる。

（（23）を修正した（42）の再掲）

また、副次的にではあるが、日本語の「不定語」に次のような分類が可能であることを示した。

（59）助詞“も”を後接した場合の「不定語」の分類

A類：“だれ”“なに”：常にNPIになる（ただし特定の構文を除く）

B類：“どこ”“どれ”：NPIになる場合とならない場合がある

C類：“いつ”　　：常にNPIにはならない　　（（32）の再掲）

4.2. 次稿への展開

本稿は「不定語」の場合に限定した考察を行うものであり、「「最小」を表わす数詞“1”を含む名詞」の場合についての考察は、次稿（三宅（準備中））において行うものとしたが、予測的に述べておくと、次稿においても、本稿で示された「不定語」の場合と同様の一般化が成り立つことが示されることになる。

［注］

1）　次のような例を参照されたい。
“命”［い＼のち］、“卵”［たま＼ご］、“男”［おとこ＼］、“鼠”［ねずみ￣］

2）　次例のように、類似の意味を持つ“全て”、“全部”、“みんな”等は、肯定述語でも問題なく、否定対極表現ではない。
そこにあるものは 全て 食べなかった / 食べた

3）　複数の箇所からの引用なのでページは略する。他にも、「未知項x」「空欄」等とも述べられているが、意味するところは同じである。なお、尾上（1983）では、このような語の持つ本質的な性質のことを「語性」と呼んでいる。

4）　“だれもが”以外にも、“も”の前に“まで”が前接している場合も例外的に可能になるようである。
*太郎もが来た / OK太郎までもが来た

5）　次のような例を参照されたい。
何も壊れなかった（*壊れた）/ *何もが壊れなかった / *何もが壊れた

6）　「全部否定」については寺村（1991）、益岡・田窪（1992）等を参照。なお、工藤（2000）では「完全否定」、沼田（1986）では「全面否定」と呼ばれているが内実は同じである。

7）　ただし、先行発話を受けた、メタ的な表現であるため、「名詞句」とも言えるものである。

［参考文献］

秋永一枝（編）（2001）『新明解日本語アクセント辞典』三省堂
NHK 放送文化研究所（編）（1998）『新版 NHK 日本語発音アクセント辞典』日本放送協会
尾上圭介（1983）「不定語の語性と用法」渡辺実（編）『副用語の研究』明治書院
工藤真由美（2000）「否定の表現」『時・否定と取り立て』岩波書店
郡司隆男（2006）「日本語の NPI の韻律と意味」『Theoretical and Applied Linguistics at Kobe Shoin』9
寺村秀夫（1991）『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版
中西公子（2010）「数詞とりたての『も』と否定」加藤泰彦・吉村あき子・今仁生美（編）『否定と言語理論』開拓社
沼田善子（1986）「とりたて詞」『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社
益岡隆志・田窪行則（1992）『基礎日本語―改訂版―』くろしお出版
前田広幸（2008）「『～モ』のアクセントをめぐって 現代共通語・京都語・倉敷語および平家正節データを対照して」児玉一宏・小山哲春（編）『言葉と認知のメカニズム』ひつじ書房
三宅知宏（準備中）「日本語の否定対極表現とアクセント（Ⅱ）―「最小表現の数詞“1”を含む名詞句」に助詞“も”が後接する場合―」（『現代日本語研究』14.［大阪大学大学院人文学研究科基盤日本語学講座現代日本語学研究室］に掲載予定）
吉村あき子（1999）『否定極性現象』英宝社

（人文学研究科教授）

SUMMARY

Negative polarity items and accent in Japanese (I):
A focus on the particle *mo* that co-occurs with indefinite words

MIYAKE, Tomohiro

In this article, we discuss the relationship between grammar and accent when the grammatical unit that includes particle *mo* functions as a negative polarity item. For instance, in *kyaku-wa dare-mo konakatta* (**kita*) (guest-TOP somebody (who)-Particle did.not.come (*came), 'No guests came at all.'), we can observe that *dare-mo* serves as a negative polarity item, and interestingly enough, the unit shows a different accent pattern from those when the expression is used in the other grammatical environments. Through the examination of this and related phenomena, this paper proposes the following generalization: The formal unit of indefinite words with particle *mo* shows the unaccented tonal pattern if and only if it exercises the function as a negative polarity item that expresses total negation.